

教員養成に対する理念・構想・養成する教員像

英米文化学専攻

国際英語学研究所は、世界中の英語変種を認め合うという国際英語の視点に立脚して、高度の英語コミュニケーション能力を育成するとともに、国際社会で求められる多様な専門知識や技術を高度なレベルで獲得し、異文化に対する深い理解や柔軟な対応力を有する、国際的にリーダーシップを発揮できる知識人の養成を目的としている。本研究科には2つの専攻があり、それぞれに国際英語学、英米文化学の体系的理解を基盤としているが、教員養成に対する理念は研究科として共有している。つまり、文化や国際性や言語にバランスのとれた深い理解を有する人材がとりわけ現代社会に必要であり、そのような人材の供給源たらんとする本研究科が、教育界におけるそのような人材の育成に対しても応分の責任を担わんと考えるのである。

前段に述べた教員養成に対する理念は、平成20年と平成21年に改訂された「中学校学習指導要領」ならびに「高等学校学習指導要領」の精神にも通じるものである。「中学校学習指導要領解説外国語編」は「1. 改訂の経緯」の中で、「知識基盤社会化やグローバル化は、アイデアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。このような状況において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっている。」と指摘しており、本研究科の理念とほぼ合致すると言って過言でない。体系ある伝統的学問知識を有しつつ、異文化や国際社会に対応する実践的能力を備えた人材を教育界にも輩出することによって、学習指導要領の精神に沿うだけでなく、本研究科の社会における存在意義、責任を明確にしたい。

とりわけ英米文化学専攻においては、単に「英米」を究めるだけでなく、グローバル化が進む世界にあつて「英語圏」を俯瞰しながら、英語や英語圏文化の本質と現代的役割を深く理解し、それを教育現場に還元できる人材の育成を目的とする。そのために、自律的に自己啓発を継続し、多元的なものの見方を養いながら、国際社会で自立して生きていく姿勢のある教員の養成を目指したい。研究指導においても、高度の知識、技術の習得を求めつつ、自主性を重んじながら、究めんとする学問に最後まで主体的に向き合わせることに留意する。

英米文化学専攻の教員養成に対する構想は次のとおりである。

ア. 構想の概要

本専攻の教員養成課程においては、前節で述べた理念に基づき、中等教育段階にある生徒のあらゆる要求に対応し、普遍性と応用性のある能力を身につけた国際人を育成することができる教員を養成することを目標としている。そのため、教員養成課程にある学生には多彩な科目の中からから万遍なく履修することを課すと共に、履修に際しては、個々が必要とする科目を自ら選ばせることによって、主体的に学び、自律的に行動する姿勢を身につけさせている。これにより、単に知識を教授するだけでなく、生徒に対する責任を常に自覚し、自己開発を継続し、「生きる力」を身をもって教えられるような教員を養成することを目指す。

具体的には、言葉に対する体系的かつ深い理解を背景とする確固たる英語運用能力を基盤とし、英語圏文化や国際社会、さらには英語教育に関する専門的知識を獲得した上で、それらを教育現場での実践に活かすことができる教員を養成したい。そのため、英語学や英米文化に関わる科目を重厚に配置する他、研究に必要となる高度な英語運用能力を獲得するための科目も配置し、教員としての全般的能力を高めることができるよう配慮している。また、研究指導を通じて、本専攻の設立の理念の射程に教員養成が当然のこととして含まれることを十分理解できるようにしている。

イ. 構想とカリキュラムの関係

教員の免許状取得のための必修科目（選択必修科目の単位数を含む）の取得要件単位数は、特に分野を指定せず30となっており、特定の科目群に偏ることがないよう配慮している。その一方で法令に定める基準を満たし、本専攻の教員養成に対する理念を具現化するにふさわしい量と質を担保している。また前段でも述べたように、多彩な科目を重厚に配置し、その中から選択必修させるシステムを採用している。特定の領域に偏向することを防ぎつつ、主体的に履修させることを意図している。

各学問領域については、体系的知識を習得できるとともに、それを教育現場で応用することまで射程に入れた科目が配置さ

れている。英語学においては、「言語文化・批評特論Ⅰ・Ⅱ」などの学問体系を理解する科目に加え、「アカデミック・ライティングⅠ・Ⅱ」などの実践系科目や、「言語システム研究特論Ⅰ・Ⅱ」などの言葉に対する理解を深める科目を用意した。英米文学においては、英米文化学を広範に学修する科目「英米文化学特論」に加え、イギリスやアメリカの文学に特化した科目、さらに、英米以外の英語文学と従来の英米文学の比較に関する講義も用意している。総じて、いわゆる「国民性」や「民族性」といった一元的文化論を越えて、国際的に個人対個人の信頼関係を築けるような真の国際人を養成するために、個々が「異文化」を有しているという視点に立った、英語や英語圏文化のプロフェッショナルを育成できるようなカリキュラムになっている。

ウ. カリキュラム運営体制

中京大学においては、大半の研究科、専攻が教職課程を有しており、それらを統括する組織として、各教職課程の代表者で構成される全学レベルの「教職センター委員会」を組織している。同委員会においては規程を整備すると共に、定期・不定期に委員会を開催することによって、各教職課程が妥当な運営を行っているか、大学としての教員養成の理念や、社会的責任に照らして監視している。また、各課程が設置されている学部においても、教職センター委員を中心に、課程運営の改善を随時行うと共に、それらを全て教授会に報告することによって学科全体が教員養成に関与する体制を整えている。また教職センター委員は各教職科目での指導内容について把握し、それらが課程設置の趣旨に照らして適切かどうか監視し、必要に応じて科目担当者と意見交換を行っている。

教職課程の設置趣旨（専攻等ごと）

【英米文化学専攻】

従来、本専攻は国際英語学部英米文化学科の上位機関として位置付けられてきたが、2014年度より英米文化学科が国際英語学科に統合されたことにより、広く「国際英語」を学修した学生がこれまで以上に入学することを想定している。本専攻はこれを好機とらえており、より幅広く、そして関心ある学生により深く、体系的に学修させられるような課程を実現している。本専攻の教職課程の歴史は長く、一定の評価を頂いていると自負しているが、時代の要請に即応した新しい修士課程、そして教職課程が、これまで以上に社会の信頼を得ることができるものとする。また、本専攻は単に従来の「英文科」の延長上にあるものではなく、現代的視点に立った国際人の育成を目標としており、時代の変化に柔軟に対応できる真に国際性ある教員を輩出することによって、教育界に対し、これまでにない有為な人材を提供できるものとする。

《中学校教諭専修免許状：英語の設置趣旨》

本専攻においては、英語や英語圏文化に関する高度の専門知識を習得させるだけでなく、国際英語の理念に従い、あらゆる言語や文化を偏向なく受容する姿勢を身につけさせている。これらは、中学校学習指導要領外国語科の目標（「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」）と合致するものである。さらに、ネイティブ・スピーカーによる授業を含め、実践的英語運用力を高めることに重点をおいているが、これは、初歩的な英語を用いてコミュニケーションさせることを重視している中学校指導要領の英語における目標（第9節第2）を達成するにあたり、重要な教師としての能力である。

上記等に鑑み、本専攻の教育課程の延長上に中学校教諭が見据えられるのは自然の成り行きでもあり、とりわけ学習指導要領が目標とする教育の達成に本専攻の卒業生が寄与できるものとする。

《高等学校教諭専修免許状：英語の設置趣旨》

高等学校学習指導要領は、外国語科の目標を「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。」としている。本専攻の教育課程においては英語や英語圏文化に対する体系的理解を促進する科目を多数用意している。

これらは教壇における説明力に繋がるものであり、生徒の「的確な理解」や「適切に伝える」能力の育成に大いに寄与するものとする。また、中学校に引き続き掲げられた「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深める」態度の育成についても、英語学や英米文化学を中心とした英語全般に対する学問的理解を発揮し、高校生に相応しい理解を促進する授業を展開できるものと考えられる。

上記等に鑑み、本専攻の卒業生が高校教育界に貢献できる可能性は十分であり、本専攻に高等学校教諭専修免許状の取得課程を設置することは、本学科の社会に対する貢献の重要な柱であると考えられる。